
荻堂夕と愉快な仲間たち

北野 鹿乃子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荻堂夕と愉快な仲間たち

【Zコード】

Z6520A

【作者名】

北野 鹿乃子

【あらすじ】

自分の父親（悪魔の科学者でも可）にふざけた実験の被害者にされた娘・夕。そのおかげで息子となってしまった！しばらくは元に戻さないと言い切る父、適当な母、シスコンの兄、唯一協力してくれる（が、方向性は間違いの）姉、一応男であるにも関わらず夕に求愛するクラスメイト（）、などただでさえ苦悩の多い夕の周りは騒がしい。苦悩を乗り越え、夕は女に戻ることが出来るのか？！

プロローグ ～荻堂夕の嘘～（前書き）

初投稿。使い古されたネタではあります、どうか鼻で笑い飛ばして：

プロローグ ～荻堂タの嘘～

名前	荻堂
性別	現在男
年齢	15歳
誕生日	8月7日
血液型	O型

おぎどう タ
ゆう

趣味・特技 空手少々

家族構成 父・母・兄1人・姉1人

と、どこにでも居るような普通の高校生している私。

ただ一点を除いて…

そう…察しの良いあなたにはもうお分かりだろう。上のプロフィールを見る限り一つの疑問がわくはずだ。

性別 現在男。現在って?…と思われた方も多いだろう。

そう私は、元々女だ！

ただ望んで男になつた訳では無い。断じて無い…そこは強調させて頂く！

なら、何故男になつてしまつたかつて?

誰か私の不幸な身の上話を聞いてくれますか？

事の始まりは受験シーズン真っ盛り、私の父親こと悪魔の科学者のふざけた実験によつて引き起こされた…。

その1～父親は悪魔だった

年が明け、受験受験の日々を送る荻堂夕は粉雪舞い散る中、普段と同じように家路についていた。

(寒う、今日雪降るつて言つてなかつたのに)
肩まである少し茶色掛かった髪を風の吹くままに任せ、早足で歩く。この辺りではちょっとした有名人である夕。その要因は整つた顔立ちがほとんど、明るく頭もいいということもあり、ファンクラブもあるほどだ。しかし美少女として近所に知れ渡つてることは本人は全く気付いていなかつたが。

しばらく歩くと、住宅街の中にひときわ田立つ赤い屋根が見える。そこが荻堂家である。

某製薬会社で真面目社員をしている父・秋彦(あきひこ)と代々受け継がれる高校の理事をしている母・日和(ひより)のお陰でこの辺りの住宅街では一番大きく立派な家であった。夕は、その家族を守るはずの家で悪魔が待つているとも知らず、玄関に向かう。

「ただいま

・・・・・

(…まだ誰も帰つてないかあ)

玄関からまっすぐ続く廊下は薄暗く、家の中には人の気配は無かつた。

「お帰り」

突然、薄暗闇の中から先ほどの返事が返つてきた。

「うわあつ！…びっくりしたあ

さつきまで誰もいないと思つていたため、ホントに飛び上がるくらい驚いた。

「お父さん、居たんならもうと早く言つてよーといつか、電氣も点けないで何やつてんの？」

「いやー、今日はイイコト思ついたからちよつと会社休んじゃつ

た」

語尾に が付くくらい陽気に言い放つ秋彦。

「…今度は何思いついたの?」

今度という言葉が示す通り、これまで科学者である秋彦は何度か『イイコト』と称し、数々の発明（と書いて迷惑と読む）を生み出してきた。

「ひ・み・つ」

今度はウインク付き。

黙つてじつとしていれば整つた顔立ちをしていて、美中年とも言えるのに（少々童顔ではあるが）言動が標準から思いつきりはみ出しているため変人扱いである。

「秘密つて…」

今までのことを振り返るときなりする夕であった。
人を小さくしてみようとか人を肉体的に強くしてみよう、頭を良くしてみようetc…これらはまだいい方で、とても口に出せないことばかりだ。しかも、イイコト（自称）を試すにあたつて必ずと言つていよいよ自分の子供を利用する。実の子にも関わらずだ。そして、そのほとんどが失敗であり、副作用がどんでもないことになる。変な出来物があちこちにできたり、三日三晩眠り続けたり、無駄なことばかりだった。

そのため夕をはじめ兄の春信、姉の朝美は常に父親を警戒しながら暮らしている。母親は知つてか知らずか、はたまた見て見ぬふりか父親の所行を止めることはなかつた。

「まあその内教えるよ~」

満面の笑みで楽しそうにそう言って、一階の奥にある父専用実験室

（夕たちは恐怖を込めそう呼ぶ）へと姿を消した。

「ヤバい…非常にヤバい！今度は一体何するつもりだらう？…」

ため息とともにそう口にしぶしぶは父親から離れていくつーと決心する夕だった。

数日後

父専用実験室にてひつそりと不敵な笑い声が聞こえた。

もつすぐ受験ということで、夕は夜遅くまで机に向かっていた。すでに家族全員が夢の中であるう時間帯であった。

「もうこんな時間か。そろそろ寝よっかな」と欠伸をしていると、ふと誰かがドアをノックする。

「まだ起きてるのか？」

と、ドアを開け秋彦が顔を覗かせた。

「うん、もうそろそろ寝ようと思つてたとこ」

「そうか、程々にしておかないと体壊すぞ…ほいら」と、湯気の上がるマグカップを差し出す。

「え？！あ、ありがと…」

（どうしたんだろ？こんな事したこと無いのに）

普段は子供に関わらうとしない（イイコト以外）秋彦である。何事であろうかとマグカップを受け取り、中身を確かめる。何の変哲もないホットミルク。少々不審に思つたが、これまでの勉強疲れで正常な判断力を欠き、数日前のやりとりや今までの悪魔の所行も忘れて、うつかりそれを口に運ぶ。

その瞬間秋彦の口元に笑みが浮かんだ。

いつの間に寝てしまったのか、ふと目を開けるとふんわりと明るくなつた天井が視界に入る。

（…明るい？！）

「ヤバいっ！今何時？！学校つー！」

飛び起き枕元にある目覚まし時計を確認した。少し前、朝起きたい夕に兄の春信が買つてくれたシンプルな日付付きのデジタル時計。

夕はもう少し女の子を意識したものは買えなかつたのかと内心思つていた。

時計が示していたのは、今日は日曜日である」と。『女心した夕はゆっくりベッドから這い出す。

(何かわざつき声低かつたような…?)

「あ、一、あ、一

昨日までの声とは明らかに違つた低い声。

(昨日ちよつと夜更かしあやつたから風邪引いたかな? ヤバいなあ)

そう昨日のことを思い出しながら洗面台へ向かつた。

鏡を見ると不思議と違和感を感じる。まだ少し寝ぼけているんだろううと思いながら顔を洗う。

「調子はどうだ?」

突然話しかけられ顔を上げると鏡の端に秋彦が映りこんでいる。

「何か変わつたことはないか?」

少々興奮気味に夕に詰め寄る。夕は訳も分からずとつあえず応えてみた。

「と、特に何もないけど…」

「その声は? !

目をギラつかせますますテンションの上がる秋彦。

「え? 風邪…かな?」

「ちょっと確認するぞ!」

「はあ? ちょっと何? ! 何すんのつ! ?」

何をとち狂つたのか夕の着ていたTシャツを捲り、何かしら確認した後落ち着きを取り戻した。もちろんその間夕は暴れ、秋彦はボコボコに殴られていた。それにも関わらず秋彦の顔には微笑みがあつた。

「今回のイイコトは成功だよ。夕

「は? !

耳を疑つてしまつタ。

「素晴らしい！素晴らしいよ……間違いなく男になつている」
夕はあまりのことに呆然としてしまっていた。

段々と思考回路が繋がつていき、自分の体を確認してみる。体の状態が分かるにつれて怒りがこみ上げてくる。小さくはあったものがあつたはずの胸の膨らみはなくなり、代わりに股の間にあるはずの無いものがあつた。

(…何で？！男になつてる！？)

自分に酔つたままベラベラとイイコトの素晴らしい話を語つている秋彦に、今度は夕が詰め寄る。

「どうして、こんな、ことに、なつてるんですか？！」

口調は丁寧だが単語単語に力がこもる。

「よくぞ聞いてくれた！」

何の悪びれもなく答える。

「まず、今回のイイコトのテーマだが、すばり、お分かりの通り女を男にしてみよっ！だ！」

言い切つた！それはもう背景に波がザバーンと来るくらいに。

「と言うわけで成功なわけだ」

それだけ言つと秋彦は身を翻し去つてじゅうとした。

「待つた！もうこうなつた原因とかどうでも良いからコレ元に戻してよ！－！」

もの凄い形相で抗議する夕。

「え？無理だよ」

「は！？」

「だつて元に戻すことは考へてなかつたから」

「はあ？！普通はちゃんと考へるでしょ！？－」

秋彦に掴みかかりガクガクと前後に揺さぶる。

「 タ。」

急に秋彦の声に冷たさが宿る。

「俺を誰だと思ってるの？」

そこではつと我に返つた夕。

そう、この男は普通の人間ではなかつた。

外面は眞面目人間。しかしその実体は冷徹極まりない天才的な頭脳を持つ悪魔であつた。逆らうとまた突拍子もない実験のためにされ（何でこんな奴が父親なんだ？！）夕の叫びは口にすることも出来なかつた。

その1～父親は悪魔だった～（後書き）

更新が遅いですm(ーー)m頑張りますのでどうか今後ともよろしくお願いします。

その2～クラスメイトは変人？～

春の陽気が辺りを包む。

桜の花びらが舞い散る中、この明るい空気に負けないくらい輝く希望を胸に抱いた新入生達が歩く。

そこに一人、それとは対照的に陰を背負つた男子生徒がいた。

（この違いは何なんですか？！）

他者と自分を比べ、更に沈む。

そう、彼（彼女）こそがこの物語の主人公・荻堂夕である。

（このセーラー着たかったのに…）

男子の制服・学ランを着てそう思つた。

ここ1・2ヶ月の間自然と女に戻ることを夢見ていたが結局夢は夢のまま。秋彦も元に戻すことなんか考えている訳がない。

結果、いつ戻るかの保証もなく両面の間は男として生活しなければならなかつた。

ここで気になるのは家族の反応である。あの日あの時果たして家族は？！

母・田和

「あらまあ、また秋彦さんイイコトなさつたの？まあ、なつてしまつたものは仕方ないわねえ（ニッコリ）」

いつもおつとりした口調で心配など微塵も感じじさせない。

兄・春信

海外赴任中。夕に対して極度のシスコンでウザくなるため連絡行かず

姉・朝美

「あーあ、こんなことばっかりして何になるのよお父さん。全く私たちの身にもなつてみてよ…でも、なかなか美少年ね…（ジユルリ）」

いつものことだと呆れながら心配はするものの最後の台詞がヤバい。

と、こんな家族に囮まれた夕はそのまま学校にも行けず、卒業式も行けないまま中学生活を終える羽目になつた。

受験に関しては元々日和が理事長を務める高校を受けるはずだったの、日和の権力で夕を男として受けさせ、そのまま入学させた。ちなみに、朝美はこの高校の保健医である。セクシーだと氣をくさで男子生徒からも女子生徒からも大人気。

夕が教室にたどり着いた頃にはすでにほとんどの生徒がいた。

この姿を大勢の人々にさらすことがほとんど初めてのため、夕はこれまでの人々の視線が自分に集まるのを感じていた。

(どうか変なのかな?)

夕はそう思っていたが、実際は元美少女、現美少年であるので注目されていることを気付くはずもなかつた。

「ねえ君…」

声を掛けられて振り返ると夕よりも少し背の低い、眼鏡をかけた少年。

パシャパシャパシャ

「!?

いきなり首から下げていたカメラで夕を撮り始める。

「何?!

「君、いいねえ~きつとこの写真高値で売れるよ」

すっかり満足しきった様子で夕に話しかける少年。突然起こった事に頭がついでいかず呆然とする夕。

「おっと、失礼。僕は大久保公平。おおくぼひょうへいよろしく

満面の笑みで握手を求めた。

「…わた、お、俺は緑川夕。よろしく」

女が男になるなんて馬鹿馬鹿しいことを信じる人がいるはずもない

が、念のため母・日和の旧姓を名乗つて高校に通つことにしていた夕は、とりあえずそう応え手を握り返した。

「いや～僕、君みたいな顔の良い人の写真を撮るのが趣味なんだけど、そのおかげでとある人々によく売れるんだ」

妙なハイテンションで語っていた公平は急に小声で囁く。

「きわどいものほどよく売れるんだけど、快く僕の趣味を手伝ってくれれば、それなりのお礼はさせてもらひつよ～。」

「はあ…」

公平の言つたことを把握できず生返事を返す。

「ところで…」

元の調子を取り戻し、また夕に話し始める。

「君、荻堂夕に似てるよね？ 親戚とかなの？」

「…え？！ は？ あっ！ ちつ、違つよ！ 違つ。誰それ？」

（何で私のこと知つてんの？）

狼狽えながらも何とか誤魔化す。

「君、荻堂夕を知らないの？」

「はあ、まあ」

気の抜けた返事をしながら、自分を知らないのかと言われても…と思いつながらも話を聞く。

「荻堂夕と言えばこじらじや下手な芸能人よりも有名なんだよ？ 美少女で、頭もいいし、友人も多いし、更に信頼も厚い etc … だからファンクラブができるほどこの辺りでは有名なんだよ」

（何故…？）

夕は知らないところで数々の情報が回つていたことに軽く目眩を覚える。

「かく言つ僕もファンの一人なんだけど… タちゃん、この学校に入つて聞いてたのに見つからないんだ。誰かに聞こつにもタちゃんと同じ中学の人はここに来てないし」

そう、幸か不幸かこの学校には中学時代の夕を知るものは入学していなかつた。日和が手を回したとかしてないとか。

「…」

もつ言葉も出ない。しばらく固まっていたが、田畠に耐えきれずふらついてしまう。

「おつと、危ない」

教室の入り口付近で話していたため、今入ってきたばかりの男子生徒にぶつかった。

「ごめんなさい」

力無くそう言い男子生徒を見上げる。

その顔は夕と同じくらい整った顔をしていた。しかし、夕がかわいい部類であるのに對して彼は文句無しにかつこいい部類である。

「…確かに荻堂夕に似てるなあ」

さつきの会話を聞いていたのか夕の顔をまじまじと見ながら囁く。

「はあ？」

「わりいわりい、俺も夕ちゃんのファンだから」

悪いと言いながらその顔は笑っている。

「君も同志か」

公平が少年に握手を求め、少年はにっこり笑いながらそれに応える。「そして、君もよく売れそうだ」

そう言うと少年を撮り始める。少年はノリよくポーズをとっていた。（この二人何なんだ？）

一人置いて行かれた夕の脳はオーバーヒート寸前だった。

「あつ、俺は井上龍一^{このうえりゅういち}。よろしくな」

ワインク付で自己紹介した。

「いいねえ～その表情」

すでに教室中の注目を集めていることに気付かず撮影会を続ける二

人を見ながら壊れかけた頭で夕は思った。

何故私の周りにはこんな変な奴らばかりなんだ？！

これから高校生活を考え、思わず涙する夕だった。

その2～クラスメイトは変人？～（後書き）

とてもなく遅い更新。少しでも早くできるようがんばります（――）感想、評価など頂ければ幸いです。

その3～姉も変人だつた～（前書き）

随分間が空きました。すいませんm(ーー)mようやく更新できました。今回ちょっと短いのですがよろしくお願いします。

その3～姉も変人だつた～

「もう、無理！！限界！」

そう叫びながら消毒液の匂い漂う保健室に飛び込む夕。

「まあまあ落ち着きなさいよ」

優しい声で返すのは姉であり、この学校の保健医でもある朝美であった。

朝美はこの学校でもの凄い人気を誇っている。誰が見ても美人で、スタイル抜群。その容姿だけでなく優しく穏やかな性格で、男女問わず人気だ。

ただ、美少年好きで時々怪しい発作に見舞われることがあるのだ。

生徒には隠してはいるが、何人かは朝美の危ない田つきに気づいているとかいなかとか。

「誰かいたらどうするのよ」

優しい声で夕をなだめる。

「だつて…だつて！あの一人、いつも目立つようなどばっかりするんだもん！」

涙ぐみながら訴える夕。前回言った通り、いくら女が男になつたという馬鹿馬鹿しいことを信じる人がいないとしても、人目を避ける方がいいに決まっている。

「公平はライフワークとか言つて毎日カメラ向けるし、龍一はそれに毎回乗るし、一人でやればいいのに必ず私を巻き込むし…」

「井上龍一くんと、大久保公平くんか…」

ひとしきり愚痴つていた夕は、ふと姉の不審な田つきに気付いてしまった。

「…龍一くんは本当イイ男だし、公平くんもなかなか悪くはないわ

ね…

そつまも、空中を見つめ、自分の世界へトロッパしている。

「…お姉ちゃん？」

恐る恐る声をかける。

「ふふ…ふふふふふ…」

すでにいつちやつた日つきで悦に入った笑みを浮かべている。

「お姉ちゃん！現実に戻つて来てえー！」

肩をしつかり掴み、激しく揺さぶる。

「はつ…？」

ようやく妄想から意識が帰還し、元の朝美に戻った。

「じめんごめん。今年は良いのがいっぱい入ってきたから」

「…お姉ちゃん…」

悪戯っぽい微笑みに苦笑いしか返せない夕。

「それよりも！‘私’とか、女言葉を使うんじゃないの！そして、学校では先生と呼びなさい！」

朝美はトリップしてた割に夕の言葉をよく聞いていた。

「はいはい、わかつてますよ～」

朝美に感心しつつ、不本意ながらそう思える。

「そう。わかつたんなら早く教室戻りなさいよ」

「え、一ヤダあー戻りたくない！」

本気で戻りたくない夕は必殺技を使つた！必殺・絶妙な上田遣いで訴える！

「…仕方ないわね。今日だけここで休んでてもいいわよ

平静を装いながらも顔がにやけている朝美だった。

（我が姉ながら何と単純な）

夕は心の中で黒い笑みを浮かべ、表情はあくまでこいつと笑つてみせる。

「やつたー！」

ガラツ

夕の歓喜の声とともに保健室の扉が開いた。

そこに立っていたのは龍一だった。

「夕ちゃんここにいたのかあ。さあ、教室戻ろつか？」

夕を見つけた途端、有無を言わさない満面の笑顔で語りかける。その笑顔に夕はさつきまでの喜びがしほんでいくを感じた。

「いや、俺、ちょっと具合悪いから」

と、歯切れの悪い返事をしながら自分の味方であるはずの朝美に助けを求める田線を送った。

しかし、そこには味方など居なかつた。

「朝美センセイ、夕ちゃんどこが悪いんですか？」

いつの間にか、朝美的手を握りながら至近距離でフロロモンをまき散らしている龍一。

(先手を打たれたー！)

「別にどこも悪くはないのよ」

頬をほんのり朱に染め、うつとりと龍一を見つめ答える。

「じゃあもう教室に戻つてもいいんですね？」

「ええ、大丈夫よ」

夕に口を挟む暇を与えないほど早業だつた。

さつと夕の方を振り向くと魅惑的な微笑みを浮かべ、夕に近づく。

「さあ、教室に戻るうか？」

「い、嫌だあ！」

怯えた表情で後ずさりしながら、必死で拒否する。

「ほら、そんなワガママ言わないで。さあ行こ！」

そんな夕の態度を全く無視し、がつちりと腕を掴み半分引きずりながら連れていこうとする。

「ほらあ、もう具合悪くないんだからさつと教室に戻りなさい」とまで味方だった朝美に背中を押された。

そして、結局龍一に引きずられながら保健室を後にする。

「私に味方はいないのかあ？！」

それは魂の叫びだった。

その4～クラスメイトは変人？PART2～（前書き）

どうもお久しぶりです（――）ものすごい久しぶりです！本当に、こんな私の小説を読んで下さっている方には申し訳ないです（Ｔ^Ｔ）見切り発車過ぎて、前が全く見えないんです（スイマセン、ただの言い訳です。すいません）とにかく、少しずつ頑張っていこうと思いますので、評価やら何やらしていただければ感謝の極みです。どうぞ、これからもよろしくお願ひします。

その4～クラスメイトは変人？PART2

「龍一に引きずられながら教室に戻ると、公平がカメラを片手にカメラを持つて待ちかまえていた。

（またかよ…）

げんなりする気持ちを隠そうともせず、露骨に嫌そうな顔をする夕。

「やあ、やつと戻ってきたね」

と言いつつ、早速写真を撮る。

「…勝手に撮るなって言ってるだろ」「

夕は更に不機嫌さを増していく。

しかし、そのことを全く気にもとめず公平は不敵に微笑う。

「夕。良いこと教えてあげようか？」

「な、何？！」

誰かを彷彿とさせる微笑みと口調。反射的にイヤな予感を感じてしまう。

「君の写真は実によく売れるんだ。

拗ねた表情はもちろんの事、滅多にカメラに収められないリアな笑顔は高額でも購入してくれる人が多いんだ」

そこで一度区切り、何の悪びれもなくこつこつ笑いながら続ける。

「しかも、男女問わず」

「…は？！」

「男子にも売れてるのはやつぱりあの夕ちゃんに似てるからかなあ…ちなみに全校生徒の結構な人数が買つてるだろ？ね～」

「……」

「あーちなみに校外販売も順調だよ」

もう、無理。頭が追いつかない。てか、追いつきたくもない。

と、真っ白になりかけの夕をほつたらかしながら会話は進められた。

「確かに夕ちゃんに似てるよな…
で、俺の売れ行きは?」

真剣な顔で問う龍一。

「そうだねえ、夕に並ぶくらいよく売れてるよ。
まあ、その内何かしらの見返りは期待してよ

「マジで? ! ジヤあもつと頑張りやおつかな? 夕ちゃんに負けて
るのも悔しいし」

と、毎度毎度行われる撮影会を始めた。

今ではクラスの恒例。

女子は集合し、黄色い声援を飛ばす。その間男子はとこと、教室の隅っこ。昨今の女子たちに逆らってはいけないということをわきまえているのか…。さやあきやあと騒がれながら撮影会は行われていた。

「ほりあ、夕ちゃんも一緒に写りつけよ~

もつ、真っ白を通り越し風化しそうになっていたところを現実に引き戻された。

ハツと氣付くと人垣に囲まれていた。

「げつ…なんじやうりや

いつもの事ながら、この人の壁にはビビッてしまつた。この壁は全く隙間が無く、例えあつたとしてもすんなりとは逃がしてくれないだろう。

「早く、早く!」

と龍一が肩を組んだ。こうなつたら逃げ場は皆無。

「夕ちゃんつて、ホントに荻堂夕ちゃんと何の関係もないの?」

「はー? えつ?」

龍一の唐突な質問に、夕はつい狼狽えてしまった。

「なーんか怪しーなあ

どんどん詰め寄つてくる。

「えーっと、その、あの…

「ねえ、どうなの夕ちゃん

「そりだー！どうなんだ？夕」

公平まで便乗してきた。

「あのう…その」

「つるさいわね！！」

突然、凛とした声が響き、三人は一斉にその声の方を見た。

「毎回毎回、いい加減にして下さらない？！」

そこには怒りを露わにした少女がいた。少女は長い艶やかな黒髪をなびかせながら三人に詰め寄る。

「私、騒がしい所嫌いなんですの」

「そんな事言つたつて」

「何か文句でもございまして？」

公平の反論を丸無視し、微笑みながら少女は言つた。その勢いに押され、龍一の後ろに隠れてしまつた夕。

「ていうか誰？」

ズバッと聞いたのは龍一だつた。

「あなた、私を知らないの？」

「うん」

やけに自信ありげな台詞に、龍一は即答。少女有り得ないとでも言うような表情で固まつている。

「よつしーじゃあ僕が紹介しようつじゃないか！」

急にテンションの上がつた公平が割り込んできた。

「彼女はの名は早坂はやさか巴ともえー夕ちゃんと共にこいらでは有名な美少女だ！」

しかも！！

なんと、あの、早坂財閥の代表の一人娘なのだー！」

実に説明的な紹介ありがとうございます。

その紹介された本人、巴は公平の喋りで冷静さを取り戻し、龍一と夕にどうだと言わんばかりの目線を送る。

巴は確かに美少女だつた。

腰まで伸びる艶やかな黒髪。

それと揃いの漆黒の瞳。肌は雪のように白く、ほつそりした身体。夕が可愛い系統なのに対して、彼女は、まさに和風美人というふわしかつた。

「ふうん…確かに美人だけど、夕ちゃんの方が可愛いよ
「なつ！？何ですってえ！」

「そうなんだよねえ

顔はいいのに性格がちょっとキツいのがもつたいたいんだよね」
素直にばっさり言つた龍一に加え、しみじみとそれに賛同する公平
だつた。

二人はそんな会話を続けていた。

「い・い・か・げ・ん・に・し・て・ち・ょ・う・だ・い！…」

そこには怒りに震える巴がいた。

「私、その荻堂夕とやらと比べられるの嫌いなんです。と言つより
荻堂夕が嫌いなんです。

どう見ても私の方が美人ですし、頭もいいし、裕福です！
なのに！」

まだ続くようなのでカット！

すっかり冷静さをなくして熱くなつていてる巴に対し、公平、龍一は
冷めた目でそれを見ていた。

「だから、そういうところがダメなんだよね…」

ため息混じりに言つ公平。

「こらー何やつてんだ

授業始めるぞ」

いつの間にか来ていたらしい先生がバンバンと机を叩く。

集まっていた女生徒は一気に席へ戻つていった。

龍一と公平はもうすでに席に着いていた。

いつの間に？

一人取り残されていた夕が席に戻るうとした時

「きやつ！」

悲鳴の上がった方を見ると、席へ戻る女生徒に押された巴が夕に倒

れ込んできた。

とつさに巴を抱きとめる夕。

「危なかつた、大丈夫？」

そう言いながら巴の顔を覗き込んだ。
その顔はポストに負けず劣らず真っ赤。

「どうかした？」

思わず夕は聞いた。

「い、いえ…どうもしませんわ」

明らかに動搖している。

「それよりもいつまで私に触れているつもり？」

「はあ、すいません…」

少々呆れながらも、つい謝ってしまった。

「べ、別にあなたが謝る必要はありませんわ
一応、私が助けていたのですから」

偉そうな口調とは裏腹に、顔を赤らめながら話している。

「一応お礼は言いますわ、一応よ！」

そして、更に全身の血液が顔にあるんじゃないかと思ひくらいいの顔色をして、絞り出すように言った。

「…ありがとうございます」

と、同時に猛ダッシュで教室から去っていった巴であった。

「お~い、早よ席に着かんか、緑川

つて、早坂はどうした？」

何がなんだか分からない夕は

「さあ？」

としか答えようがなかった。

続く

つてこれで終わり？今回、影薄くね？！

以上、主人公の心の叫びでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6520a/>

荻堂夕と愉快な仲間たち

2010年10月12日16時05分発行